秋から冬へかけての鉢物管理

園芸部　伊　藤　雅　己

春から夏にかけて戸外で育ててきた大切な鉢物を，そろそろ室内に取り込まなければならない季節になってきました。

夏の間，戸外の自然の恵みの中で育てられてきた鉢物を，室内という人工の環境下で管理するには，それ相応の苦労を要するものです。また，これからどのように管理したらよいのか，無事に冬を越して翌年も立派な花を咲かせてくれるだろうか，などという疑問や不安を持っている人も少なくはないでしょう。

これらの疑問や不安は、それぞれの植物が持つ性質を知らぬために起こるもので，これらの問に対して参考にしてもらうために，この欄をもうけました。

鉢物を管理するに当ってまず気を付けなければならない点は，その植物本来が持つ性質を十分に知り，それに合った栽培方法を講ずることです。

秋から冬にかけての室内栽培では，温度，湿度，日光などの生育上必須不可欠の条件が制約され，個々の植物の最も好む環境が与えられにくくなってきていますが,植物本来が持つ適応性をうまく利用することによって，誰にでも容易に栽培できるようになれます。それにはまず個々の植物が持つ性質を知らなくてはなりません。

管理方法は，植物の生育のし方によって，大まかに次の二つに分けることができます。

Ⅰ）春から夏にかけて生育を続け，秋から冬にかけて休眠に入るもの。

Ⅱ）生育に適する条件さえ整えば周年生育を続けるもの，または秋から冬にかけて生育するもの。

Ⅰ）の分類に入るものでは，冬期間生育を停止しますので,灌水は極くひかえ目とし,肥料はまったく与えません。温度は低目に保ち出来るだけ温度変化をさけます。日光もほとんど必要としませんが，常緑樹では時々日光に当てた方がよいでしょう。

現在生育を停止しつつあるものは，自然の冷気に当てて生育の停止を待ち,株の充実を計ります。この際，水や肥料を過剰に与えたり加温したりすると二次生長を起こし，それが株を枯らす原因ともなりますので気を付けて下さい。

Ⅱ）の分類に入るもので周年生育を続けるものは，本格的な寒さがやってくる前に室内に取り込み，人工の温度管理のもとで十分に日光に当て，灌水施肥をしながら生育を続行させます。

またこれから生育の始まろうとしているものは，一般に涼しい気候を好む植物が多く，そのためあまり高温にするのは好ましくありません。日光，灌水，施肥ともに生育に合わせて十分に施こしましょう。

以上極く簡単に植物の基本的性質を述べてきましたが，これからは種類ごとの栽培方法を述べてみます。

盆　栽　類

一般に松柏や雑木などの盆栽は寒さに強く，普通は戸外で越冬させます。しかし積雪の多い地帯では冬期間雪による枝折れの心配がありますので，雪のかからないような棚の下で簡単な冬囲いをするとよいでしょう。この際注意しなければならないことは，完全密封はさけて一部換気口をもうけ蒸れることを防ぎます。積雪のあまりない地帯では寒風による寒害を受けやすいので，風よけ程度に囲いをしてやるとよいでしょう。

そのようにして春の芽出しの頃まで，ゆっくりと冬眠させてやるのが安全です。また止むを得ず室内で越冬させる場合には，決して暖かい所へ置いてはいけません。高くても5℃，できるなら鉢が凍るか凍らない位の所へ置きたいものです。

室内で冬越した盆栽類が，春になって急に枯れてしまうのは，ほとんどが越冬中の高温のせいなので，温度管理だけは十分に気付けて下さい。

観葉植物類

観葉植物と一口に言ってもその種類は非常に多く,一概にその性質を論じる訳にはいきませんが,一般には熱帯または亜熱帯産の植物のため耐寒性はあまりありません。

多くのものは0～5℃位までの低温にしか耐えられず，しかも生育適温はそれより15～20℃位高目の所にあります。

冬期間の温度管理はやや低目の15～20℃位に保ち，これよりもあまり高い温度は感心できません。特に，観葉植物は高温でなければ育たないという先入感から，25～30℃位の高温で栽培している人を見かけますが，これでは植物が軟弱徒長してしまい，決して健全な生育は望めません。

それよりも15～20℃位の温度で栽培した方が，硬くしまった株に育ち，その後の生育にも好影響を及ぼします。

秋から冬にかけては日光も弱く，温度も下がり，乾きにくい季節になりますので，灌水については十分に注意し、鉢の表面が乾いてきてから与えるようにします。また鉢底からの吸水は避け、決して過湿にならぬように注意して下さい。

肥料も，植物自体の生育が夏に比べ衰ろえてきてますので，少な目に施して下さい。前記の注意さえ守れば冬期間無肥料でもかまいません。

日光の量は，夏に比べ約⅓位と少くなってきてますので，窓ごしの光なら直射光線でも葉焼けを起こすことはないでしょう。葉焼けさえ起こさなければ，葉が多少黄ばんできても十分に光に当てたいものです。

また冬期間の室内では，往々にして空気が乾き過ぎになりますから，頻繁に霧をかけてやるなり加湿器を設置するなりして湿度を上げるようにして下さい。空気が乾燥してくると葉先から枯れ込んだり，葉ダニが多発したりします。これは観葉植物だけでなく，全ての植物についても言えることです。

熱帯性花木類

ハイビスカスやブーゲンビレアなどの花木類は大の日光好きですので，特に光線の弱い冬期間は終日陽光に当てるようにします。日光が不足すると蕾が落ちたり，花芽形成が阻害され花を見ることができなくなります。その他の管理は観葉植物と同様です。

サボテン・多肉植物類

サボテンは意外に寒さに強く，水が凍らないような所なら十分に越冬可能です。また冬は休眠期に当たるため，灌水は月に1～2度位と極くひかえ目にし乾燥状態を保ちます。

肥料は与えませんが，日光には十分に当てるようにします。

多肉植物の栽培もサボテンとほぼ同様ですが，それらの内の一部のものは秋から冬にかけてが生育期に当っているものもあります。これらのものの管理は，その生育状態に合わせ，水も肥料も過剰にならぬよう配慮しながら，必要なだけ十分に与え生育させます。

洋　ラ　ン　類

洋ランは種類が非常に多く，その性質も種々様々ありますが，一般に栽培されているものとして，カトレア類，シンビジューム，デンドロビューム，ファレノプシスなどが主なところでしょう。これらのものはそれぞれ性質が異なり，栽培方法も別々に考えなくてはなりません。

まずカトレア類ですが，これは花の艶やか故に洋ランの主流をなすものであり，ちょっとしたコツを飲み込むと最も簡単に育てることのできる洋ランの一つです。

その性質は過湿を最も嫌い，極端な低温には耐えられません。日光はよく好む方なので，葉焼けをしない限り十分に与えて下さい。

また洋ラン全般について言えることですが，生育は非常に遅く，そのため肥料はあまり必要とせず，植え換や株分けに対する抵抗力が弱いので，できる際り避けた方がいいでしょう。

具体的に言うと，灌水は鉢の中心部までほぼ乾いてから与え，温度は15～20℃位に保ち，肥料は生育中のものに限り週に一回位の割で極く少量施します。

デンドロビュームもカトレア類とほぼ同様ですが，異なる点は周年直射日光で育て，肥料は生育途中の8月までで打ち切り，秋に約1カ月間10℃位の低温に当て花芽を付けさせます。

シンビジュームはカトレア類とは少し異なり，水，肥料共に十分与えます。この場合注意することは極く水はけよく植え，鉢に水が溜まるようではいけません。

日光，通風共に好みますので，陽当たりがよく風通しのよい所へ置きます。

ファレノプシスはバンダなどと同様に高温を好む種類なので，最低18℃位は保てるようにして下さい。また，強い光線には弱いので冬でも少し遮光してやります。水，肥料共よく好みすが，その割には根腐れを起こし易いので，極く乾きやすく植えた上で回数多く与え，肥料も極く薄めのものをたびたび与えるようにします。